

ハシビロコウ

佐々木 佳子 青森

さへづりは持たなくていい羽ばたきもできなくていいハシビロコウがいい
かんとんに父よ私を信じるな入院隠し連れ出す娘を
父はまた戻れるものとして家をゆつくりと出る病を忘れ
県ごとの寿命くらべる記事ひろげ竹の子の皮をつつみて捨てる
風ぐ眼もちてハシビロコウになる今日を佇み明日に佇む

けん責未満

小倉 敬* 神奈川

抜きたくてもぬけないトラック従えて自転車はゆく古い人に乗せ
やわらかに伸びてゆく枝 新緑もいよいよな萩は花もいよいよ
宛て名には亡き父の名が記されて選挙応援のはがきは届く
部下という言葉は寂しいかと言つて仲間じゃ偽善が見え隠れする
小言以上けん責未満で叱られている声聞こゆ、嫌な気分だ

コロラトウーラ

藤崎 絢子 神奈川

枝伐られ胴体だけのけやき萌ゆる路地をゆくかもスーパ一の帰り
やうやくに咲くとメモしてライラックの小花束がドアに懸けあり
しどけ、うるい、わらびの小束売りゐしよ吾ほどの媪低く坐りて
老いて棲む三浦半島トンネルの口に五月の卵の花咲けり
コロラトウーラひびかせたのち画眉鳥の青き背がゆく町屋根のうへ

馬のごとくに

岩崎 佑太 東京

かぜ狂ふさくらの夜よ枕辺に地藏菩薩の立ちたまひけり
しろき灯に照らされながらをさなくて犬は夜道にさくら食ひをり
立ちながら馬のごとくにめつむりぬあをき蓮の花ひらくまで
ありえざる核なき世界祈るとき紋白蝶は空そらひくく飛ぶ
はるうらら遊覧船のこぶこぶと三十の首隅田川ゆく

鉄のほひ

四野宮 和之 東京

独り勝ちだつたセイタカアワダチソウ衰へてます自身の毒で
あたりたかき布団とシーツ取り込みてベッドメイクす八十八夜
感染者数の公表けふは無し新型コロナが（五類）となりて
街路樹の花盛りゐるてバスのなか「べにばなとちのき」との声あり
てのひらの鉄のほひが消えませんが理髪帰りに逆上がりして

胸の空

山下 佐保 新潟

银杏木のまないた撫づるすべらかさ森のかをりも料理にそへて
七月まで帰らないよといふ吾子の声が響けりわが胸の空くら
私の私による私のための豪華な「母の日」の寿司
風のなか手をさしのべるみどりこの小さき手と手のやうな楓
あを梅の実七つ石のうへにあり子らの遊びし昼の痕跡

なめくぢたち

杉本なお 静岡

ほんのりと夕陽のいろに濡れてゆくなめくぢたちのきれいな背中
通販の箱を開けたりもう何を注文したかも忘れたあとに
ただ春の土だけがある田のなかにながく佇む青鷺の影
かけすぎてしまつた七味唐辛子 舌にちひさな火花がひらく
いつ何と引き換へにしてきたのだらう失くしたはずの尻尾がかゆい

指輪の痕

吉田美奈子 愛知

下り行く水みづからがせめぎ合ひ川のおもては常に新し
野の風が記憶の扉そと開くクローバーの花母と編みし日
はにかみて幼子笑めりたんぼぼの光のティアラ被せてやれば
外したる指輪の痕のほの白し「ある」より「ない」といふこと重し
われにまだ為残ししこといくつ有り燕ひるがへる空のまばゆさ

チエレステブルー

飯田進* 兵庫

沈黙の時の重さを嗅ぎ分ける廊下の奥の真つ黒な猫
天婦羅にしてパリパリと食べている真つ赤な薔薇に合う酒は何
六月の圃場整備の側溝を歩く長靴、田螺を踏んで
透明な八月の陽に照らされてチエレステブルーの芋虫が這う
追い詰めることより間合いが大切な竿のしなりてルアーフィッシング

言葉をつむぐ

康

哲 虎* 兵庫

定期券売り場の小さな窓口に大きな声をねじ込む男
病室で患者の爪を切りながら患者の心を聞く午前二時
神様が蝶の姿で現れて息の仕方を教えてくれた
目が覚めるたびに微笑む心電図のT波の訳がわかった夜は
紙きれに言葉をつむぐ石ころの下の心に陽をあてたくて

魚屋さん

百 留 ななみ 山口

白子アラ真子も百円あたらしき魚屋さんの朝いちの棚
解体を終へしマグロのアラあつめ養殖マグロの餌つくるらし
ト口箱に氷ふたたび注がれて五月のアジはかがやき放つ
ゆたかなる葉ざくらの蔭ふたひらの黄蝶もつれてひとつとなりぬ
いまのわれをするり脱ぎ棄てはつなつの夕陽の帯の海上をゆく

くぐつてくぐつて

田 中 久 子 長崎

無料^たの湯に学校帰り浸かりしと嬉野温泉母のふるさと
急行が渡つたあとの鉄橋をくぐつてくぐつて五月のつばめ
海からの光射し込む教会のステンドグラスに椿は咲けり
教会の近くに犬はすてられて人の来るたび尾をふりまくる
選挙カーどんどん近づき農道に隠れ場所なく握手を交はす